

王維

Wang Wei

多文化社会学部教授。中国瀋陽市生まれ。幼いころから中国琵琶を習い、プロの琵琶演奏者となる。来日後、99年名古屋大学大学院人間情報学研究科博士後期課程修了。香川大学教授を経て、2014年10月に長崎大学に赴任し現職。主な著書に『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ』（風響社）、『素顔の中華街』（洋泉社）など。



異文化の都市長崎で何かをつかみ、世界へ発信

きつかけは正倉院の琵琶 「多文化」は自分の個性

中国の文化が色濃く反映されている長崎。その文化の担い手の中心である華僑の二世、三世が織り成す社会をテーマとする研究者が、昨春秋、長崎大学に赴任しました。王維教授。唐の時代の名詩人と同じ名前です。

「詩人の王維のイメージが強すぎて、会うまでは男性だと勘違いされることが多いですね。所属は多文化社会学部ですが、私自身、まさに多文化な人間です」。

中国・瀋陽では歌舞団で活躍するほどの腕前の琵琶奏者でもあり、来日のきっかけも琵琶でした。

「演奏で古典の楽曲に取り組むこともあるのですが、とても難しいものです。古代の琵琶は今のものとは形も弦の数も違い、その姿は絵でしか残されていません。しかし、日本の正倉院の宝物殿には八世紀に中国から渡来した琵琶があることを知って興味をおぼえたことが日本留学のきっかけの一つでした」。

名古屋の大学、大学院の学費や滞在費も琵琶の演奏活動一本で賄ったとか。民族音楽だけにとどまらず、興味は次第にその背景となる文化の伝承や生活環境に広がっていききました。「琵琶という楽器は、西アジアを起源としながら中国や日本でそれぞれ違う形に発達しました。中国ではメロディ

を奏で、日本ではバチをかき鳴らしながらの語りを中心。どうしてそんな文化変容が起こったのかを調べるうち、福建省の南音という音楽に正倉院の四弦琵琶に似た琵琶が使われ、福建から東南アジア各地にも移住した華僑によって伝承されて来たことを知りました。それならば日本に来た華僑のなかにも伝わっているのではないかと仮説を立て、調査をしているなかで長崎の明清楽や月琴の存在に行き当たったのです」。

中世から四〇〇年以上に渡ってアジアの交易拠点として栄え、日本の華僑の発祥地でもある長崎。現在、新地中華街の住人は華僑と日本人が半々。江戸時代に中国から伝わった明清楽も今では日本人が中心となって継承しています。長い年月を経て中国と日本が自然に混ざりあって暮らす様子を目のあたりにした王維教授は、調査対象を日本の華僑社会そのものに焦点を合わせます。

「歴史上、日本では北米や東南アジアなどの海外の華僑のような集団的移住が見られず、華僑のコミュニティへの溶け込み具合も地域によって違います。ちょうど長崎ランタンフェスティバルが盛り上がり始めたところで、どうして中華街の人たちの小さなお祭りがここまで大きなイベントに膨らんだのかを新地中華街の関係者の方々や、長崎市の行政担当者にも話を聞きました。文化を継承したいという華僑の願いと、新たな観光の魅力を発信したいという長崎市の思惑がうまく結びついたもので、世界でも例がありません。それは長崎の歴史や文化の土壌でしかできないこと。横浜や神戸の中華街の調査も行って日本の華僑研究を専門書にまとめたら、一般向けの新書としても刊行されました」。



かつて長崎ランタンフェスティバルでも3年連続で琵琶演奏のステージを披露したそうです。現在は中国琵琶だけでなく日本の琵琶の「語り」も習得。「中国と日本の2種の琵琶を弾き比べ、違いを感じてもらおうと風変わった演奏会を行ったこともありますよ」。

かを新地中華街の関係者の方々や、長崎市の行政担当者にも話を聞きました。文化を継承したいという華僑の願いと、新たな観光の魅力を発信したいという長崎市の思惑がうまく結びついたもので、世界でも例がありません。それは長崎の歴史や文化の土壌でしかできないこと。横浜や神戸の中華街の調査も行って日本の華僑研究を専門書にまとめたら、一般向けの新書としても刊行されました」。

チャイナタウンの調査はその後、さらにスケールを広げ、サンフランシスコやバンクーバー、チェコ、ロンドン、南アフリカでも展開。そして原点ともいえる長崎で昨年研究生活がスタートしたのです。

地域の観光も人間も無限の力を秘めている

前任地の香川大学では、観光と地域資源についてもフィールド調査を行いました。

「全国各地を見て歩きましたが、芝居小屋など昔ながらの財産をうまく活用しながら観光振興の核としている例もありますね。見渡すなかで感じるのは、どんなに苦しい状況に追い込まれてもやればできるということ。これは観光だけの話ではなく、人間も同じ。学生も実は無限の力を秘めています。異文化を資源として発展してきた交流都市長崎で、何かをつかんで世界に発信し、足を踏み出してほしい。ここは、それが可能なまちです」。

民族音楽を入口に、華僑社会、チャイナタウン、中国系新移民、日中音楽、観光と、いくつものテーマを研究の柱に据えて同時進行する独自の研究スタイル。「でも全部繋がっています。今考えているのは、毎年世界各地で開かれている世界華僑華人研究大会（ISCO）を長崎に誘致することです」。

長崎はそれだけのポテンシャルを持っており、自分にはその使命感があるという王維教授。長崎の個性を客観的に評価し、行動する、新しいタイプの研究者が登場しました。

働くウーマン奮戦記

大学はわたしの仕事場

7

長崎大学で働く女性教職員の活躍ぶりを毎回一人ずつ紹介します。ステキな先輩たちの後ろ姿を見て女子学生も何かを感じて欲しい。そんな願いをこめたコーナーです。